

市民科学

第10号

通算第23号



発行：NPO法人市民科学研究室 (Citizen Science Initiative Japan)
〒113-0033 東京都文京区本郷 6-18-1
Tel&Fax: 03-3816-0574
e-mail : info@csij.org

http://www.csij.org/
毎月1回発行
無料(サイトからもダウンロードできます)
編集責任者：上田昌文

【巻頭言】

食の「安全」と農業の未来

山寺 久美子(市民科学研究室理事)

解凍するだけで食べられる弁当向けの冷凍食品がよく売れているようだ。レンジで温める手間もいらず、弁当箱にただ詰めるだけで昼には丁度食べ頃になるらしい。家庭内での料理もずいぶん簡略化されるようになった。90年代後半に頭打ちになった外食に変わって、最近では中食(コンビニ弁当やデパ地下の総菜など)の割合が急増している。外食に比べ低価格であることや、孤食が増えたことが主な理由だという。外食や中食など出来合いのものに頼った食生活は、内容の分からない添加物・ポストハーベストにより汚染された安価な輸入食材・遺伝子組み換え食材などのリスクの高い実体の見えない食を氾濫させている。表示偽装や残留農薬などの不安なニュースは、このような食生活の延長線上にあるようにも見え、私達消費者が変わっていく必要性も強く感じる。「食の安心・安全」を得るには、食に関する幅広い知識を得ることや、料理の手間を惜しまない努力が必要であると思うが、それらと共に、普段あまり注目されることのない日本の農業について真剣に考えることが大切なのではないか。

スーパーで買い物を通すごく一般の消費者にとって、農業は遠い存在かもしれない。しかし、何気ない日々の消費は、日本の農業のあり方について強力なメッセージを発している。最近スーパーでよく目にする「有機JAS」マークと「トレーサビリティ」表示のついた食品は、安全を求める消費者に人気があるが、それらに派生する農業の問題について少し考えてみたい。

最近、お手軽価格の「有機JAS」が増えている。これは安価な輸入有機JASが増えていることによる。もともと有機JASは、有機農産物の国際商品化に向けてつくられた基準であるため、国産品と輸入品の扱いは区別されていない。そして実は、有機JASのかなりの割合が輸入品である。(平成16年・農林水産省の調査によると、輸入有機JASは国産有機JASの約10倍)中国産野菜の残留農薬問題の影響もあり、国産野菜に安全なイメージを抱いている消費者は多い。しかし今後この有機JASの存在が、国産有機だけでなく国産農産物自体の脅威となることが予想される。安全を求める消費が、逆に輸入を促進することになるのである。その先の日本の農業のことをどれだけ意識して、消費者は有機JASを選んでいるだろう。

「トレーサビリティ」は生産・流通の履歴であり、直接商品の安全性を保証するものではない。しかし、そこに記された生産者の名前や顔は消費者に信頼感を与えており、スーパーでは人気商品となっている。さて、そのトレーサビリティ制度は、多額のコストと労力負担が必要であるため大量生産・大量消費がひとつの原則となっているが、その

ことで地場の良心的な農家を地元のスーパーから追い出してしまふことがあるという。地産地消を守れないこの制度は、本当に有益なものといえるのだろうか。農家と直接コミュニケーションをとれる地場野菜の直売所では、そもそもこの制度が不要である。長距離輸送とは縁がない新鮮な野菜を手に入れることや、身の回りの自然環境を守ることなど、地域の農業の果たす役割は大きい。今後このような農業のあり方こそ大切にすべきではないか。

有機JASマークやトレーサビリティ表示のついた商品が、実際に「安全」であるとは言い切れない。有機JASには、実は約30種の農薬の使用が認められており、その中には毒性を疑われているものもある。トレーサビリティは、先にも述べた通り、安全性を目指した生産がなければ、ただの生産履歴でしかない。しかしこれらの制度は、消費者に対して「安全」であれば、それで良いのか。という問題提起をしている。輸入への依存度が高い日本の食生活が生み出す環境負荷や、いずれ来るであろう地球規模の食糧難からも、日本の農業を早急に再生させることは必須である。私達消費者が安全に対する認識をさらに深めることは大変重要だが、それと同時に将来を見据えた消費を考え、身近な農業と繋がっていく必要があるのではないだろうか。



1928年に外国人牧師の提言で始まった歴史ある市場「鎌倉市農協連即売所」。地元農家が自分の畑で採れた野菜を直接販売している。

『エンハンスメント論争』(社会評論社)を11月に出版します

市民科学研究室で1年ほどをかけてすすめてきた翻訳が、11月25日(日)に行われるサイエンスアゴラでのシンポジウム『サイボーグに未来はあるか?』に機をあわせて出版されることになりました。

原著は英国のシンクタンクDEMOSから発刊された『Better Humans? The politics of human enhancement and life extension』(Paul Miller, James Wilsdon ed., DEMOS, 2006)で、これの翻訳を第1部とし、日本人研究者によるエンハンスメント(人間改造、能力増強)技術に関する論考を7編まとめたものを第2部とする本を作りました。『エンハンスメント論争 身体・精神の改造と科学技術』(上田昌文+渡部麻衣子編、社会評論社 2007)です。

ここでは、その本の「あとがき」(上田)と、訳者の一人である土屋敦(東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)が同書のために執筆した論文「エンハンスメント論争をめぐる見取り図 一歴史的源泉と現在の争点を中心に」を、著者自身が短くまとめた論考を掲載します。



【『エンハンスメント論争』あとがき】

私たちの社会は、意識するしないにかかわらず、人間が持つ様々な「能力」によって存立している。生命活動のための運動や感覚や消化や生殖にかかわる基本的な「能力」、さまざまな願望や欲望を満たすための体力や知力や経済力や創造力、さらには開発や支配や統治に関わる技術力や軍事力や国力など、その広がりやとらえ方はいろいろだが、少なくとも近代社会は、こうした能力を可能な限り高めて欲望の充足にあててることを基本的に是とする社会であり、私たちの価値観や「成功した人生」のイメージもそのことに大きく規定されている。高い能力を身につけることで、人は幸せになり、社会は豊かになる、と皆が信じている。

科学技術は、実現不可能にみえた夢、充足不可能にみえた欲望ををかなえる能力を次々と私たちに付与し、そのことで私たちに新たな夢や欲望を喚起してきた。この“欲望と能力のスパイラル”の駆動力として科学技術に、今、新たな(究極的な?)局面が生じている。ロボット工学、脳科学、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー、情報技術などの先端技術によって「人間が人間を改造する」ことが当たり前になる社会が到来しようとしている。エンハンスメントは、この新たな局面を包括的にとらえる概念と言えるだろう。不老不死、人体と機械が融合した超高性能のサイボーグといった、いまだSF的なイメージがつきまとうものから、遺伝子診断や遺伝子治療など生命倫理の議論が集中する生命操作技術、そしてスマート・ドラッグ(知力を高める向精神薬)や美容整形や人工内耳といった、国によってはすでに広く普及している技術まで、人間の身体や精神に何らかの手を意図的に加えて、その能力を増強しようとする技術全般にかかわる。(続く…)

[【→ホームページへ】](#)

「リビングサイエンス評価チャンネル」を会員にオープンしています

JST(科学技術振興機構)社会技術研究開発センターの公募型プログラム「社会システム/社会技術論」の平成16年度採択課題「生活者の視点に立った科学知の編集と実践的活用」の研究の一端として、「リビングサイエンス評価チャンネル」というウェブサイトを用いた実験を市民科学研究室で開始しました。

これは、生活にかかわる科学技術の18分野のどれかを自分の関心に応じて選び、疑問や意見を書き込み、皆で意見を交換しながら、“生活者のための科学技術”の姿を探り、その実現を促すための場です。

10月半ばから市民科学研究室の会員の皆さんにオープンにしています。ぜひ、次のサイト

http://www.channel-csij.jp/csij_ch/

にアクセスしていただき、登録(IDとパスワード)を行っててください。「このサイト自体に関する質問」や「何でも投稿コーナー」なども設けています。

皆で利用価値の高いサイトを作っていきます。

分野	トピック	投稿数	参加数	閲覧数	評価点	最新記事
① 教育 / コミュニティ・人間関係	健康・栄養	1000	8	18	0	2007年10月22日 18:12
② 食(農林水産)	健康・心のケア	1000	8	18	16	2007年10月22日 17:57
③ 健康・生活	健康・ドラッグ	1000	1	10	0	2007年10月22日 16:27
④ コミュニティ・人間関係	健康・心療学的な悩み	1000	1	10	0	2007年10月22日 16:04
⑤ コミュニティ・人間関係 / 健康・生活	健康・子ども・人間関係	1000	1	10	0	2007年10月22日 16:02
⑥ 健康 / 材料・化学物質	健康・ハイテク医療機器の普及を促せる教育用電子ツールで「生活者のための科学技術」の姿を探り、その実現を促すための場です。	1000	4	10	0	2007年10月22日 15:28
⑦ このサイト自体に関する質問 / このサイト自体に関する質問など	健康・市民参加型研究の普及にオープン	1000	1	10	0	2007年10月22日 15:27
⑧ エネルギー	健康・高齢化と医療	1000	1	10	0	2007年10月22日 15:11
⑨ エネルギー / フード・遊び	健康・エネルギー問題を考えるシンポジウム	1000	2	10	0	2007年10月22日 10:42
⑩ 健康・生活	健康・道にのって歩く	1000	3	10	0	2007年10月22日 10:08

http://www.channel-csij.jp/csij_ch/

翻訳 精神障害の深層—それは環境とどう関連するか (翻訳 杉野実+上田昌文)

精神障害はなにゆえ生じるのでしょうか？ 精神障害は環境と何からの関係があるのでしょうか？ 環境の意味を広くとって、遺伝子への環境の作用を含めて考えるなら、どうでしょう？ 最近の研究によって精神障害の原因に新しい光を投げかけられていることを伝える論文を紹介します。

精神障害の深層—それは環境とどう関連するか

チャールズ・W・シュミット(『環境健康展望』2007年8月)

多数の患者を入院させ、障害による生産性の巨額の損失をもたらし、自殺の危険をおおいに高めている精神障害は、社会が直面するもっとも重大な脅威のひとつである。この潜在的に危険な状態は、遺伝と環境の複合によって生じることが、科学者には以前からわかっていた。遺伝学的研究は、精神障害の複雑な生物学的基礎をあきらかにし、特定遺伝子が特定個人に、鬱病や統合失調症になりやすい傾向をもたらしていることをしめした。

いまでは疫学と分子生物学が手をたずさえるようになったおかげで、精神障害の原因論における環境の役割はより明確になった。精神科治療の改善をすすめる非営利団体「治療助言センター」の会長E・フラー・トリー氏などは、精神障害は環境保健の領域にはいりつつあるといっているくらいである。氏はまた、その領域から治療法のあらたな進歩がすぐにあらわれるであろうともいう。

「20世紀医学のもっとも偉大な進歩は、伝染病の特定とワクチンによるその予防、衛生設備と栄養の改善、そして環境汚染の危険削減によって達成されました」と、コロンビア大学医学センターの臨床精神医学・疫学準教授アラン・ブラウン氏はいう。「(精神障害の)環境的危険要因が確認されれば、その危険と発症率を低下させる予防的措置がわかるであろうと、期待していいのです。」(続く…)

【→ホームページへ】



Michal Szoto / iStockphoto

Environmental Connections: A Deeper Look into Mental Illness
Charles W. Schmidt
Environmental Health Perspectives Volume 115, Number 8,
August 2007

書評 『あなたのTシャツはどこから来たのか？』

—誰も書かなかったグローバリゼーションの真実—

評者: 永添泰子

著者は米国ジョージタウン大学ビジネススクールで学部生、大学院生、企業エクゼクティブ相手に、国際経済を教える現役大学教授である。専門は中国を含む国際ビジネスにおけるビジネス倫理や社会公平性である。一読して、こんな先生に習いたいものだなあと尊敬してしまった。

この本が出版されたのは2005年だが、彼女を旅に駆り立てたのは、1999年2月に、彼女の勤務するジョージタウン大学で彼女が偶然聞いた、ある女子学生がマイクに向かって群衆に語った次の言葉だった

「あなたのTシャツは誰が作ったのですか。食べ物も飲み物も与えられずにミシンにつなされたベトナムの子供でしょうか。時給18セントしかもらえず、1日に二度しかトイレに行かせてもらえないインドの若い女性でしょうか。…彼女は12人部屋で生活しているのです。食事はお粥。残業手当も受け取れず週90時間働かせられます。…彼女は貧乏だけでなく不潔で病気が蔓延する環境で暮らしているのです、すべてはナイキの利益のために」

これを聞いたとき、リボリさんはこの話について何も知らず、「どうしてあの女子学生は知っていたのだろうか」と不思議に思った。

そして彼女は、自分がフロリダのドラッグストアで買った、ある1枚5ドル99セントのTシャツの身元を追い、数年に及ぶ、3大陸にまたがる数千マイルの旅に出かけるのである。(続く…)

【→ホームページへ】



ピエトラ・リボリ著
『あなたのTシャツはどこから来たのか？
誰も書かなかったグローバリゼーションの真実』
(東洋経済新報社2007年)

INFORMATION

◆大好評！市民科学研究室 恒例の 「実践料理講座」+クリスマス・パーティー！

日時：**12月8日(土)午後2時～**
(パーティーは午後5時半～)

会場：アカデミー湯島 5階実習室 (文京区湯島2-28-14) TEL03(3811)0741

第1部 実践料理講座

市民科学研究室メンバーから、一級の腕前を持つ4人の講師が登場！料理作りを学びながら、参加者全員でパーティー料理を作ります。
料理実習費：無料 (定員20名)

第2部 クリスマス・パーティー

今年も楽しいイベントをご用意しています。
名刺など自己紹介できるものをお持ちください。(定員50名)
参加費：料理教室から参加：大人3000円/子ども1500円
パーティーから参加：大人3000円+差し入れ1品/子ども1500円

☆お申し込み：
講習会・パーティーとも予約をお願いします。
電話：03-3816-0574



《11月に上田が行う2つの講演のご案内》

◆第1回未来学フォーラム

「新日本未来学会平成19年度研究発表会」 11月10日(土)午後1時～午後6時30分

場所：東京経済大学 国分寺キャンパス
参加費：無料

①第1セッション 午後1時～午後3時
先端技術の未来学(特別テーマ：身体の未来)
～上田はこのセッションでエンハンスメントに関する講演をします。

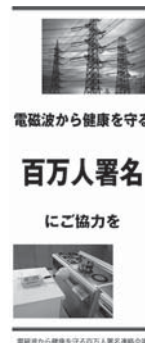
◆公開講座 暮らしのなかの化学物質(全4回)

第2回「化学物質は身体に浸透する～ナノテクとは何か」 11月15日(木)19時～21時

場所：総評会館 5階501号室
参加費 全4回 3000円 各回 800円(※第3回のみ1500円)
申込先：日本消費者連盟 TEL：03-5155-4765

◆リーフレットを2つ同封しました

原子力資料情報室が作ったリーフレット『地震大国に原発はごめんだ』と、「電磁波から健康を守る百万人署名連絡会議」が作った署名協力要請のためのリーフレットを会員の皆さんに同封しました。前者は有料ですが、市民科学研究室からのクリスマスプレゼントとさせていただきます。署名の方もご協力よろしくお願ひします。



◆サイエンスアゴラ2007 シンポジウム

「サイボーグに未来はあるか？ ～エンハンスメント技術の光と影」

日時：**11月25日(日) 15時～17時**

登壇者および所属：

小林宏(東京理科大学工学部機械工学科准教授)
金森修(東京大学大学院教育学研究科教授)
櫻井圭記(プロダクションIG)
磯山 隆(東京大学大学院医学系研究科講師)ほか2名

場所：国際交流館メディアホール

主催：NPO法人市民科学研究室、財団法人未来工学研究所

→詳しくは同封のチラシをご覧ください。



市民科学研究室とは

市民科学研究室は次の3つのことがらを促進するNPO法人です。

1. 科学技術にかかわる様々な意思決定や政策形成への市民参加
2. 様々な社会問題の解決に向けた専門知の適正な活用
3. 「持続可能で生き生きとした生活」を実現するための科学研究や教育の実践

市民の問題認識力を高めるための講座や勉強会を運営し、市民が主体となった調査研究や政策提言や支援事業をすすめています。「リビングサイエンス」(生活を基点にした科学技術)という概念を手がかりに様々な角度から「生活者にとってよりよい科学技術とは」を考えそのアイデアを実現していこうとしています。

あなたも会員になりませんか

どなたでもいつでも入会ができます。次の3つのサービスを提供いたします。

- ①月刊「市民科学」で紹介された記事や論文の全文をホームページからダウンロードできます。
- ②毎月行われる「市民科学講座」の音声ファイルと資料をダウンロードできます。
- ③年に2回、「市民科学」で紹介された主要記事・論文をまとめた『市民科学 セレクション』(80ページ)が届けられます。

次の3種類の会員があります。

- ★ダーウィン会員……年会費3,000円 ①+②
- ★ファール会員……年会費6,000円 ①+②+③
- ★レイチェル会員……年会費10,000円 ①+②+③+講座費免除

詳しくはホームページをご覧ください。 <http://www.csij.org/>